

L.ガル著『アプス伝』における戦時下のアプス像

——諸アプス批判への反論の基本視点—— (1)

山 口 博 教

L. ガル著『アプス伝』における戦時下のアプス像

— 諸アプス批判への反論の基本視点 — (1)

山口 博 教

目次

- I. はじめに
- II. 諸アプス批判論に対するL. ガルの著作の展開
 1. L. ガルのアプスに関する三著作
 2. 第一著作(論文)の構成
 3. 第二著作『アプス伝』と関連CD及びその目次
 4. 第三著作について
- III. L. ガル『アプス伝』における戦時下のアプスの活動
 1. 序章
 - (1) はじめに
 - (2) 政治と経済
 - (3) 連続性
 - (4) 1910年モデル
 2. 帝政期における子供時代
 - (1) ボンの刻印とドイツ帝国下の子供時代
 - (2) 職業上の目標と仕事始め
 3. ワイマル共和国期における修行・遍歴時代
 - (1) 外国にて
 - (2) 大恐慌下, 危機管理による名声の獲得
 4. 「個人銀行家」へ飛躍する時代
 - (1) ナチスの政権獲得とカールシュタットの経営
 - (2) コメルツバンクにみる国家と銀行
 - (3) 富裕者アプス
 5. 第3帝国下, ドイチェバンク取締役の時代
 - (1) ドイツ最大のユニバーサルバンク 外国部への就任
 - (2) オーストリアの併合とクレディトアンシュタルト (以上本号)
 6. 1945年以後の無職・代表権無き助言者時代
- IV. 諸アプス批判への反論の基本視点について
- V. まとめ

I. はじめに

ローター・ガル (Lothar Gall) 著『銀行家, ヘルマン・ヨーゼフ・アプス伝』(*Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.*) が2004年にミュンヘンで刊行された。(以下ではガル『アプス伝』と略する。) これは、ガルが執筆したアプスに関する第二著作である。また戦時中のH.J. アプス(以下アプスと省略する)の活動についてのいくつかの批判に対し総合的に反論を加えたドイツ国内では唯一の著作である⁽¹⁾。

ガルはフランクフルト・アム・マインにあるヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学(通称フランクフルト大学)の歴史学講座の教授である。専門は最新の著作での著者紹介では中世史・現代史となっている。しかしその著作を見ると19世紀から20世紀にかけてのドイツ社会・政治史を専門としていることが分かる。本来は中世史・近代史の専門家であったと思われる⁽²⁾。

ここで取り挙げる『アプス伝』は現代史に属する彼の唯一の分野である。ガルはなぜこの著作を刊行しなければならなかったのだろうか。言い換えると、なぜ現代史をも専門に付け加えることになったのであろうか。その契機は1995年に刊行したドイチェバンク125年記念に同行が刊行した『ドイチェバンク1870-1995』(*Die Deutsche Bank 1870-1995*)の一つの章を担当し、論文を執筆したことにあっ

た、と筆者には思われる⁽³⁾。

この記念誌はL.ガルをはじめとする5人の研究者が執筆しているが、その他のメンバーは以下のとおりである。ゲルハルト・フェルトマン (Gerhald Feldman)、ハロルド・ジェームズ (Harold James)、カール・ルードヴィッヒ・ホルトフレーリッヒ (Carl-Ludwig Holtfrerich)、ハンス・ビュシュゲン (Hans Büschgen)。

このうちの3人、ガルとフェルトマン及びジェームズは1980年代後半にドイチェバンクが招聘した歴史検証委員会のメンバーでもあった。この委員会はホロコースト問題に関する調査をすべく同行が設置した委員会であった。メンバーは5人からなり、残りの二人は、アブラハム・バルカイ (Avraham Barkai) とジョナサン・スタインバーク (Jonathan Steinberg) であった。この委員会の設置理由と研究対象などの点については、H.ジェームズが、ユダヤ人資産の「アーリア化」に関連する彼の第二著作の序文で書いている。筆者は既にこの点について紹介した研究ノートの中で既に触れた。そこでジェームズが強調していたことは、個々の研究者による独自の研究方法を、委員会が認めていたことであった⁽⁴⁾。

なおこのホロコースト問題は、「アーリア化」の問題だけではなく、ナチス体制下での強制労働、略奪した金の中立国経由でのスイス金融機関への転送問題など多岐に関連していた。またアメリカ合衆国で強制労働や略奪された資産に対する変換をドイツやスイスに要求する集団訴訟が開始されてからは、マスコミも含め議論が沸騰した。この結果スイスにおいてもこれらの問題を調査する独立専門委員会の設置が1996年に決定された。その結果膨大な資料を駆使した研究成果が2001年から2002年にかけて公刊された。その『最終報告書』の翻訳が日本では2010年に刊行されている。なおジェームズはこのスイスの委員会

のメンバーの一人でもあった⁽⁵⁾。

しかし残念ながらスイスでの研究者への資料公開は、一定の時期が経つと再び非公開となることが検討されている。またホロコースト問題では、まだ資料のすべてが研究者に公開されているわけではない。さらにドイチェバンク関係者以外の研究者がアプスの個人文書に接触できるのは、2014年以降である。さらに単純な行き過ぎた批判への反発から、新しい角度からの部分的反批判も出てきている。これらの批判のピークは2000年代中盤頃であったと筆者には思われる。一度は高まった波が、近年次第に引いてきていることも否定できないと考えられる。このようにホロコーストに係わる諸問題は、取り上げ方自体も含め、様々な困難さを伴うものになってきている⁽⁶⁾。

以上のような状況下でL.ガルの『アプス伝』を取り上げるのは、本書が唯一の、またドイツの金融学会、歴史学会及び経済界を代表するアプス擁護論である、と考えられるからである。この著作は、最近では低調となっているとはいえ、各種のアプス批判論への強固な反論となっている。また遅かれ早かれこの伝記は日本でも翻訳が出てくるであろう。このためその反論の基本視点を検討しておくことは、今後この分野での議論を深めていく上で重要であると考えている。

ただし拙稿では『アプス伝』の前半の約三分の一の部分、特にアプス生誕から第二次世界大戦終結と戦後の経済活動の再スタートの時点までを取り上げる。戦後のアプスのドイツ連邦共和国での活動については、本稿との関連で必要な限り触れるにとどめることを、あらかじめ断っておきたい。

Ⅱ. 諸アプス批判論に対する L.ガルの著作の展開

1. L.ガルのアプスに関する三著作

まずガルのドイチェバンクとアプスに関連

する著作刊行の流れを見ておくことにする。

ガルがアプス問題について執筆する契機となったのが、1995年に刊行されたドイチェバンク125年記念史への執筆であったことは既に触れた。そこではジェームズが担当した、ナチス体制下を扱った章にも接触している。すでにその時からアプスを擁護する論文の執筆準備を始めていたと思われる。

まずアプスを中心テーマとした論文が、1998年に出されている。それが第一著作、企業史学会誌 (*Zeitschrift für Unternehmensgeschichte (ZUG)*) に掲載された論文 *A man for all seasons? Hermann Josef Abs im Dritten Reich.* である。直訳すると「第三帝国における H.J. アプス—全天候型の人材?」となる。この全天候型人材は「八方美人」とも訳しても良い。というのは「いかなる政治状況にも対応する人物」という意味合いが込められているからである。この表現が示す具体的内容はこれから見ていく（なお先に見たドイチェバンク125周年記念史でのガルの論文は、ドイチェバンクの創業期を扱ったものであった。このためこちらの論文がアプス自体を中心テーマにおいた第一著作となる）⁽⁷⁾。

次の第二著作となるのが、本稿の次章以下で詳しく取り上げる『アプス伝』であり、ここでの紹介は省く。そして第三著作が、ハンス・ポール (Hans Pohl) がフランクフルト・アム・マイン市にある銀行史研究所の委託を受けて編集した『20世紀におけるドイツの銀行家』(*Deutsche Bankiers des 20. Jahrhunderts*) の中で担当した1章である。短いが非常に簡潔な文章であり、「H.J. アプス (1901-1994)」(*Hermann Josef Abs[1901-1994]*) という表題となっている⁽⁸⁾。

ここでは以上の著作のうち、特に第一著作(論文)と第三著作の特徴及び三つの著作の相互関連について述べておきたい。第二著作については、Ⅲ.で取り上げるため、ここでは関連C Dとその目次にのみ触れるにとどめ

る。

2. 第一著作(論文)の構成

第一著作(論文)は、ガルのアプス研究の出発点であり、彼の基本的視点を提示した研究ノートという意味合いもある。それはこの論文が、議論の重要ポイントに触れるとともに、その後の『アプス伝』の下敷きとなっているからである。論文の冒頭には英文の要約が付されていて、少し長くなるが以下にその全文を掲載する。

「戦後のドイツで H.J. アプスの名前は政治とビジネスを繋ぐリンクとして知られている。第二次世界大戦後のドイツ復興期間中、最も影響力を持つ人物の一人として、アプスはいくつもの重要な責任を任されていた。復興金融金庫 (*Kreditanstalt für Wiederaufbau*) を創出し、指導した。また長期間に渡る『ドイチェバンク』の監査役会長、コンラート・アデナウアー首相の経済顧問、1951・52年ロンドンで開かれたドイツ戦時賠償のための国際交渉 (ロンドン債務協定) の代表者であった。1965年に定められた監査役会ポスト制限するドイツ法は、『アプス法』と名付けられるほどであった。

これに加えてアプスの名前は、ナチス体制下のドイツの銀行を調査した時には、重要な役割を演じていた。『ドイチェバンク』についての OMGUS レポート』の中で、彼は1938年以來『ドイチェバンク』取締役会の1メンバーであったと、非難された。それゆえ、彼はユダヤ人諸会社の『アーリア化』と大戦中にドイツの影響力を広げるための重要銀行と会社の乗っ取りに対する責任を問われた。

しかしながら被占領国の多くの銀行家と企業家は、ナチス体制下でアプスが彼らを支援するあらゆる努力を払っていたことを

証明した。またアプスはドイツのレジスタンスともコンタクトを取っていた。例えばヘルムート・フォン・モルトケ (Helmuth von Moltke)、彼の親友の一人、ペーター・ヨルク・フォン・ワルテンブルク (Peter Yorck von Wartenburg) とも。彼らは体制への抵抗によりともに殺害された。

この論文は新しい資料をもとにして以下のことを検討する。アプスが個人的にナチス体制に関わっていたのかどうか。彼がユダヤ人諸会社の乗っ取りやIG ファルベンの犯罪、及びナチス政府の金取引に責任を負っていたのかどうか。またアプスという有能な人材に与えられていた選択の幅にも光を当てる。彼がナチスドイツという条件下で経歴の追求を望んでいたことをも。いくつかの例証は、いかにしてアプスがユダヤ人銀行家を助け、またいかにして1940年に『ライヒスバンク』の金をスウェーデンへ転送したかを示す。アプスは謎めいた人物として記されている。彼は高名な『ライヒスバンク』副総裁プール(Phul)と友好関係を保ってはいたが。クライザウ (Kreisau) における討議に加わる目的を持つような形で、ドイツ抵抗運動に接触することはなかった。]⁽⁹⁾

この論調は、『アプス伝』と比べるとアプス擁護論という点では、まだはっきりしない点も見受けられる。しかしその後の展開の萌芽がいくつか提示されている。第一には、新しい資料を使用したことである。それは東西ドイツ統合後に利用可能となった旧東ドイツとロシアが収蔵していた資料、及びアプス自身の個人文書を指している。また第二に、戦後のドイツ連邦共和国での活躍を強調していること。第三に、ナチス幹部及び抵抗運動グループとも接触したが、双方に対し深入りしなかったこと。そして第四に、IG ファルベンの犯罪と金転送については調査・研究中で

あり、この論文の時点では明確な答えを出していないこと、以上である。

なおこの論文には、要約部分をのぞくと章立てが一切付されていず、論文全体で一つの章となっている。節分けも行われていない。また文章がやや美文調で、筆者がこれまでとりくんできた金融・証券論や企業論関係の論文とは構成、内容、スタイルの点で大きな相違がある。その点では読み解くのに一定の苦勞を要した。このため内容から読み取って自分なりに章別編成を以下に示し、筆者自身及び読者の理解を深めるようにしておきたい。内容を分けると以下ようになる。冒頭の数字は論文には明示されていず、筆者が便宜的に付したものである。また後ろに付けたのはその開始ページ数である。

- [1] 生涯, 123ページ。
- [2] カールシュタット百貨店 (Karstadt), 128ページ。
- [3] コメルツバンク (Kommerzbank), 131ページ。
- [4] クレディトアンシュタルト (Creditanstalt), 136ページ。
- [5] メンデルスゾーン (Mendelssohn), 139ページ。
- [6] フベルトゥス株式会社 (Hubertus AG), 144ページ。
- [7] 金転送, 149ページ。
- [8] ナチス体制との関わり, 155ページ。
- [9] ベルギー百貨店, 161ページ。
- [10] IG ファルベン, 163ページ。
- [11] 終 (敗) 戦, 169ページ。

3. 第二著作『アプス伝』と関連 CD 及びその目次

次に第二著作の『アプス伝』は、2004年に出版されたガルの大部の著作である。この中ではジェームズのアプス批判に対し反論を加えることを一つの重要な課題としている、と

筆者は考えている。ガルの第一著作（論文）執筆後に、ジェームズのアプス関連第二著作（2001年出版）が刊行され、アプス批判が鋭く行われたため、それに対する反論を加える必要を念頭に置いて書いた、と考えられる。またその他のアプス批判にも総合的に応えなければならなくなったためでもあろう。このため戦後のアプスの活動を含め、アプスの生涯全体を記述することを構想し、書いていったと思われる。というのは、1995年にドイチェバンク125周年記念史の執筆段階ではそれほど顕在化していなかった、研究者間でのアプスについての相異なる見解がこの時点で全面化したという背景がある。

なおこの著作の刊行と同時に、ミュンヘンのNEXUS audiobooks社から、この著作と同名の2枚一組のCD、*Der Bankier Hermann Josef Abs—Eine Biographie von Lothar Gall*が刊行された。これを筆者は、2006年か07年のドイツ旅行中にフランクフルト・アム・マインの街中の書店で購入した。声を吹き込んでいるのは、ドイツの放送局Tagesschau社のニュース・キャスター、ヨー・ブラウアー（Jo Brauer）である。著作のすべてを読み上げているわけではなく、重要部分と箇所を抜粋部分を朗読している。このCDはガルの著作と同様の目次がしおりに付されている。著作の方にはページ数のみしか表示されていないのであるが、このCDのしおりにには冒頭に数字が付されていて、章立てが行われている。ただし、CDの方は著作の最後にあった「結語」が省略されているという違いもある。⁽¹⁰⁾

それはともかく第二著作の目次と開始ページを挙げると以下の通りとなる。なお、冒頭の数字は筆者が便宜的につけたものであることを断っておきたい。

- [1] 序言（7ページ）。
- [2] 帝国下の子供時代（14ページ）。

- [3] ワイマル共和国における修業遍歴時代（23ページ）。
- [4] 「個人銀行家」へ飛躍する時代（36ページ）。
- [5] 「第三帝国」下のドイチェバンク取締役時代（47ページ）。
- [6] 1945年以降の無職・代表権なき助言者時代（121ページ）。
- [7] 復興金融公庫の責任者へ（142ページ）。
- [8] ロンドン債務協定とイスラエルとの契約（164ページ）。
- [9] 大銀行の将来をめぐって（207ページ）。
- [10] 資本と経済と政治の橋渡し（228ページ）。
- [11] 取締役会長（252ページ）。
- [12] 国際金融専門家（293ページ）。
- [13] 「ドイチェバンク株式会社」の金融政策発言者（319ページ）。
- [14] 監査役会（330ページ）。
- [15] 経済政策の綱領決定をめぐる闘争（351ページ）。
- [16] 1970代の政治経済大変革におけるアプス（382ページ）。
- [17] ビュルガーとパトロロン（408ページ）。
- [18] 結語（440ページ）。

以上の目次をみてわかるように、『アプス伝』は、アプスの生涯をドイツ近・現代史の中で位置づける壮大なプランの下に書かれている。また既に述べたように、ジェームズが行ったチェコのボヘミアにおけるベームシュェ・ユニオンバンク（BUB）のアーリア化の際のアプスの不当な行為という非難に対し、反論を加えることが一つの大きな課題となっている。ガルは後で詳しくみるように、資料の取り扱いを含めジェームズの出した結論は推測にすぎないことを強調する。CDを刊行することは、この点を含めアプスがナチスの犯罪行為へ加担したわけではないことを、研究者だけではなく、広くドイツ国民へ知ら

せると同時に訴える狙いを持っているのではないかと、筆者は考えている。

4. 第三著作について

この著作はすでに触れたように、ドイツの銀行家を紹介する論文集の第一番目に掲載された論文である。わずか12ページの短いエッセー風の論文である。第二著作は500ページを超える大作であったが、その全体を肩の力を抜いて要点だけをさりとまとめた体裁となっている。筆者の小稿では戦時下のドイチェバンクとアプスの社会経済活動に焦点を当てているため、アプスの戦後の活動については充分踏み込めないが、この第三著作ではそれらにも重点をおいて書かれている。

またそれだけには限定されず、第二著作で述べたアプスの第二次世界大戦以前と以後の経済・金融活動を全面的に評価することにより、誕生以来のアプスの生涯を肯定的に把握することである。その狙いは、アプスの人生が戦前も戦後も本質的な変化を遂げていないこと、ほぼ一貫した経営姿勢を貫いたことを強調する。このことは以下のように示される。

「1945年は周知のように、ドイツの歴史上に深い崩落と決定的な変化を、社会と人間に刻み付けた。(略)人生と職業上の高みに立ったほんのわずかの人物が、この崩壊とすべての連続性を断ち切る断絶の中で、社会と職業上の業績から見て以前と同じ水準と領域に耐えて生き永らえた。その人脈の第一に数え上げられるのがH.J.アプスである。」⁽¹¹⁾

またこの見解は、アプスが重視した1910年当時の社会経済体制が、ナチス期を経た戦後も継続されたことを強調する立場にも繋がっている。

「(ナチス体制下で-山口) 諸関係と構

造の継続と持続は、一定のまた最後に決定的となった時期にも可能だったろうか?これがそうであったと同時に、ドイチェバンクの指導陣の圧倒的多数にとっての目的ともなっていたことを、アプスは当時もまた回顧の中でも常に繰り返し説明している。これが彼の立場だったし、この立場から彼は個別事例の中での自分の行動と行為を自らと、同時に他者に対しても正当化した。」⁽¹²⁾

またこの著作では引用された文献はドイチェバンク125年記念史とZUGでのガルのアプス関連第一著作(論文)と第二著作『アプス伝』の他には二著作にとどまっている。その一つは1979年にTVインタビューを行ったヨアヒム・フェスト(Joachim Fest)が書いた『アプス』であり、他の一つはジェームズのアプス関連第二著作である。

前者は、インタビューの中で「アプスがマイダネクとアウシュヴィッツでの恐ろしい出来事について知らなかった、と嘘をいう人間には属さないこと」、「それについて知らなかったことを隠すことはない」、とフェストが書いているが、これをガルが紹介している。またこれと関連するが、秘密護衛警察(Sicherheitsdienst)と親衛隊が行った計画的な殺人行為(ホロコースト-筆者)については、暗黙の了解があったのではないかということも含め、決してアプスが知らなかったと認めることはしないと、ガルは強調する⁽¹³⁾。また後で詳しく見るが、ジェームズの批判に対しては資料の取り扱い方自体から反論を加えている。

また第一著作ではその副題から見られるように、戦時下のアプスとナチス政権との関係について二重の性格が見られる、と捉えていた。一方では政権へ協力し、他方では一定の距離を置いていたことである。ただしこの第一著作(論文)を書いた段階では、ガルはアプス批判に対して、慎重な対応姿勢を見せて

いた。それに対し第二著作を執筆した段階では、アプスの戦時下の活動を積極的に評価するのではないが、少なくとも擁護し弁護する立場に移行したことが示されている。

さらに第三作ではドイツ連邦共和国におけるアプスの外交活動に対する礼賛者であるユルゲン・イエスケ (Jürgen Jeske) とヨハネス・ラウ (Johannes Rau) の賛辞を引用することで、このアプス擁護が一段と確信に満ちたものへと高められている。そのことは、アプスのドイチェバンクにおける9年間の監査役会長の仕事に対する「20世紀最大の銀行家」というデイヴィッド・ロックフェラー (David Rockefeller) の賛辞を引用していることに見て取れる。またガル自身も次のようにアプスの銀行家としての能力を高く評価している。

「その際には、もちろん争う余地のない金融政策上の専門性と稀に見る集中力及び業務能力が、多くの分野に渡る正確な知識と結びついていた。また彼の魅力と驚くべき取引技術が重要な役割を演じた。」⁽¹⁴⁾

その一つが戦後のロンドン債務協定での交渉であり、アデナウアーの絶大な信頼を勝ち得た。このアデナウアーとの関係では、10歳という年齢差はありながらも、両者が同じボン生まれのカトリック教徒であることをガルは指摘する。活躍分野が政治と経済という違いはあれ、ナチスに対する対応、民族主義に対するアイデンティティ、そして外交姿勢、これらにおける両者の共通性を強調する。そして第三著作の最後でアデナウアーとアプスが成し遂げた仕事について以下の結論を下している。それは、戦後のドイツ連邦共和国における経済社会の復興が「1933年以前の諸関係の回復の試み」、もしくは「1914年以前の時代への回帰」であった、とする見解である⁽¹⁵⁾。

以上の諸点を念頭におき、以下では第二著作『アプス伝』にもとづき、戦時下のアプスの活動をガルの記述に沿って整理し、紹介していく。そのうえで最後に、筆者のアプスに関する総合的な評価を加えるを試みたい。

Ⅲ. L. ガル『アプス伝』における戦時下のアプスの活動

1. 序章

(1) はじめに

普通の場合には、経済人の活動や生活は政治家や文化人、スポーツマンなどには知られていない。しかし例外がありアプスはその一人である。このような説明から、ガルは最初の章を展開している。それに加えて、1904年に生まれ、92歳で亡くなったアプスについて、まず次のように書いている。

「常に注目を浴び、最後までドイツ経済界の最重要人物、最も著名な代表者として、また国家と経済と政治が絡む網の目組織の中の黒幕 (graue Eminenz) として評価されていた。」⁽¹⁶⁾

ただしこれは世間での評価であることに、注意を促している。

彼の個人的資質に還元する表面的な解釈も多い中で、ガル自身はこのような見方を否定し、彼が生きた時代との関係の中で評価することを要求する。「個人的生活様式、出世、業績、時には敗北などに代えて、彼の特質と行為に体现される時代が持っていた基本問題と基本傾向と関心事を明らかにする」ことを。「なぜなら彼は経済と政治の関係の中で、肯定的な意味でも否定的な意味でも、各時代及び特定社会と構造の代表的代表者であると同時に、シンボル」でもあるからと主張している⁽¹⁷⁾。

(2) 政治と経済

アプスが金融界の典型的人物として現れる

のは、まずワイマル期と「第三帝国」初期におけるベルリンの個人銀行商会デルブリュック・シックラー (Delbrück Schickler & Co.) の代表権を持つ若きプロクリスト (支配人 Prokurist), その後の営業主 (Geschäftsinhaber) としてであった。世界経済恐慌, ワイマル共和国の崩壊, ナチスの権力掌握下, 「彼は支配的金融勢力 (Hochfinanz) の代表者の基本イメージを代表し, 實際上その行動の模範例であった。」とガルは表現している⁽¹⁸⁾。そしてユダヤ人経営者は別にして, 当時の経済界の要人同様に新条件 (ナチス体制 - 筆者) のなかでも, それまでと変わらない道を歩み続けたことをも強調している。

ただし当時も, またその後もアプスはナチ党員とはならず, 精神的にはカトリック信者として体制とは明確な距離を置いた。しかし立場上新秩序に縛られ, 少なくとも間接的には他者と同様にナチス体制に仕えた。そして1937年末に36歳でドイチェバンク取締役役に任命された。その結果, この職に就いた多くの者たちに特徴づけられるように, 実際にはこのシステムに結びつきその下働きをした結果, 体制との接近はより強くなっていった, とまとめている。

(3) 連続性

ガルは, ドイチェバンク自体のドイツ経済における重要性にも触れている。少なくとも20世紀初頭以来, 他の銀行と並んで, 帝政ドイツと世界経済への進出の中で中心的な銀行 (経済・金融界の司令塔) の一つへ成長した。ナチスの大銀行に対する留保と攻撃を受けながら, その権力と勢力に仕え, 長期的には欧州への拡張政策の一機関となっていった。「第三帝国」システムへの組み込みには抵抗しなかったどころか, ヒットラーの略奪開始時には, オーストリアとズデーテンラントで比較的「平和的に」, また戦争中期には利害が一致したことで, より体制への接近が強められた。そして戦争末期には国内外でナチス

との実際上の協力が取り結ばれた, と整理している。

この中でガルはアプス個人の立場については, 以下のように見ている。対外拡張の開始時点で, 同行取締役会の対外業務責任者として登場した。多くの役員同様, ナチズムの権力的で略奪的な政策目的やイデオロギー, とりわけ悪行には距離をおいていた。しかし, 背後の前提条件や意図には参加しなくとも, 実際にはこの目標に沿って仕事をした。以上のことを踏まえて, 第一著作 (論文) と同じよう記述を与えている。

「アプスは今日まで, ナチズムと『第三帝国』における経済・金融界の指導的一大勢力の中にあって, アンビバレンツな関係をもつ人物であり, 絶えまなく新たに生じる議論の対象とされる。」⁽¹⁹⁾

また, 第二次世界大戦後には, 模範的人物と見なされ, 彼の人格は, ドイツ帝国からドイツ連邦共和国へ繋がる連続性とその国家の性格付けをめぐる問題と関わることになる。それは, アプスが1945年以降他の誰よりも, 経済・社会・政治の密接な結合, いわゆる「ライン型資本主義」を体現しているからである。すなわち, 1940年代から60年代にかけて長期に渡る時代のシンボルの人物であり, 一般的意識を規定した時代を代表する人物であった。国際金融と多くの国家債務についての専門家, 精緻な識者であったと。

(4) 1910年モデル

序章の最後では, アプスの人格がナチス政権確立以前も崩壊以降も変わらずに継続していること, 及びその原因 (原点) に触れる。

「明白なことであるが, カトリック信者であるライン人は, 特殊プロイセン的特色と同時に勇猛果敢な軍隊からはアデナウアー同様に距離を置き, いわゆるウィルヘルム

主義者の絵に書いたようなプロトタイプを示さない。しかし帝国後期に支配的であった政治社会への洞察、アプス自身が名づけた『1910年モデル』の刻印は、彼らには強固に、そして決定的に刻まれている。』⁽²⁰⁾

そしてこの刻印をアプスは、ワイマル共和国の政治社会秩序を肯定し、経済・銀行業界という職業上の分野では「第三帝国」への周辺へも持ち込んでいた、とガルは見ている。ワイマル共和国を経由したドイツ帝国の「第三帝国」への継続性の要因は、ワイマル共和国の崩壊とそこからの転換にもかかわらず「第三帝国」までも続くように、疑問の余地の無い強固さを持っている、と考える。

以上の点を政治・社会・経済における一般的関係と展開の中であきらかにすることを目標として、ガルはこの自伝を書くことにした、と筆者には思われる。

2. 帝政期における子供時代

(1) ボンの刻印とドイツ帝国下の子供時代

この章では冒頭でガルは、アプスに関する三つの規定を鮮明にする。

「1901年10月15日にボンの法律家ヨーゼフ・アプス (Josef Abs) の末っ子 (1906年にもう一人の娘が誕生) として誕生した Hermann Josef アプスは、その出自から見ると、ライン人・カトリック教徒・市民階級 (Bürgertum) の子弟という三つのラベルで表現されることを好んでいた。』⁽²¹⁾

この三点を踏まえた詳しい説明をガルは展開している。その記述に沿って、その一つ一つを紹介していく。

まずラインの刻印は、生前アプス自らが強調していたが、東プロイセンとその支配家族への皮肉な優越性を込めた態度であることが指摘される。この地域はフランス革命軍によ

る蹂躪以来20年間に渡り支配された領域であった。精神的には選帝侯国ではあったが、新たな君主が1815年以来、東プロイセンから来ることになった。また「ラインラントの品格」は、大学と役人気質、士官と豊かな金利生活者のボンで見られた特徴であり、隣接のケルン (商業と商人の都市) やアーヘン (工業都市) とは全く相違していた。そして旧プロイセン、東エルベ的統治、軍隊とバランスを取り、共生することが求められた。このような対応はアプス家では、カトリック教にもとづく強固な生活様式で用意された。とりわけ母カタリーナ・アプス (Katharina Abs) によって。彼女はリューカーラート生まれ、エスキルヒナーの繊維工場主の家族の娘であり、カトリック信仰と結合した禁欲的厳格さを、他の10人の子供とともに躱げられ育った。いわゆる文化闘争中のプロイセン国家による教会への圧迫を決して忘れることはなかった。

この点で父は学生時代に、直接その後の行動を規定する世界観を身に付けることになる体験をした。法律学生時代の最初の学期末に英国へ行かされ、ベーゼラーガー (Boeselager) 家の家庭教師に従事した。同家は文化闘争中にウェストファーレンから英国に移住していた。アプスはその息子達の世話人となり、インスブルックとプラハを案内した。目的はプロイセンの影響下でないドイツ系の学校へ彼らを入れることだった。そしてその2年間の外国滞在と身につけた語学力が、J. アプスをして後に狭い意味での市民階級への上昇を達成させた。その父 (祖父) は家具製作業を営んでいたものの、病気がちのため大きな成果を残せなかった。息子はデューレンのギムナジウムで苦学し、法律学就学後に結婚した。判事試験に受かり、学位取得を経てボンの経済市民階級入りを果たした。政治的には中央党に傾斜した経済専門の法律家であった。フベルトゥス株式会社への資本参加により資産形成にも成功した。

このような新興市民階級の家庭にアプスは生まれた。このため母からはラインラントの出自とカトリック信仰の、また父からは長期国外滞在中に裏付けられた体験の影響を受けた。このように貴族・士官志向のプロイセンドイツの教養市民とは異なり、また商人世界や上流階層への上昇志向とも距離を置く家庭環境であった。ただし当時の教養市民の理念と雰囲気の中で育ったことは事実で、ボンの市立ギムナジウムに通い、古典言語と古典文学を学んだ。

その後の人生では貴族層とも親交を結んでいる。特に1944年7月20日のヒトラー暗殺の試みに関わった首謀者とも。また1936年19歳の時には、メタル会社のリヒャルト・メルトン (Richard Merton) とも知り合いとなった⁽²²⁾。

(2) 職業上の目標と仕事始め

兄二人が第一次世界大戦で戦死していたため、アプスは若年時の兵役を免れた。同期生が学校時代の最後のアビトゥア証明書に職業目標を教師、文献学者、法律家、士官としていたのとは異なり、アプスは「商人」と定めていた。また音楽と絵画の素養も身につけ、親族とボンの音楽家にオルガン演奏を習った。チューリッヒの画商とも親交を深め、独自の絵画収集も行った。それは世界大戦や革命という混乱の時代において、商業という「非精神的」職業に対する職業意識上の目的をより鮮明にするためでもあった。⁽²³⁾

アプスが属した「戦争青年世代」は帝国の崩壊に伴い、市民世界も後景へ退いたと考えた。しかしアプスは市民世界を固持し、自己意識をカトリック信仰にそれまで同様に結び付けていた。終戦時には、ケルンのイエズス会の神父ルードヴィッヒ・エッシュの呼びかけで創設されたカトリック青年組織「ノイエス・ドイチュラント」へ参加した。

ワイマル共和国が形を整えた1920年に、アプスはボンのギムナジウムでアビトゥアに合

格した。教師はボン大学の国家学か経済学への進学を勧めたが、アプスはルイス・ダーフィト (Louis David) という小個人銀行商会での実習を開始した。この商会は1893年に創業され、当時60人の従業員を抱えていたが、1926年に倒産することになった。あらゆる銀行業務分野に必要な会計記帳や商業通信について、下からたたきあげるといふ教養に没頭することが要求された。しかし学業のための時間は残されていなかったため、1921年に修了する用途はたたなかった。それに代えてアプスは実際的な経済生活の将来に備えることにした。速記を習い、また英・仏・蘭語を学び始めた。

その後妹の病気療養のためもあり、当初ミュンヘンで実習を続ける計画を変えてケルンの銀行商会デルブリュック・フォン・デア・ハイト (Bank Delbrück von der Heydt Co.) へ応募した。1919年にフランツ・ケーニグス (Franz Koenigs) によって設立された銀行商会であった。ただこのことは父の賛同を得られなかった。しかしアプスはここで従業員として職業生活を開始し、ほぼ13年間多くの業務分野で修業・遍歴時代を過ごした。またデルブリュック・シックラーの出資者 (Teilhhaber) となり、その3年後にはドイチュバンクの若き役員となっている⁽²⁴⁾。

3. ワイマル共和国期における修業・遍歴時代

(1) 外国にて

アプスは、1921年銀行商会デルブリュック・フォン・デア・ハイトで20歳に満たない年の従業員となった。半年間は実習も兼ねていて、銀行業務の習得に励んだ。同時に都市生活を過ごし、生涯付き合うことになる友人や後の結婚相手とも巡り会っている。F.ケーニグスは有能で勤勉な若き銀行家にすぐに目をつけ、1923年にアムステルダムに設立したローディウス・ケーニグス商事株式会社 (Rhouidius Koenigs Handel-Maatschppij) への転勤を勧めた。アプスはこれを受け、そ

こで為替業務に従事しすぐに習熟した。当時オランダの外国貿易はポンドスターリングとドルで、大陸とは他の欧州通貨で決済され、アムステルダムには重要な為替市場があった。また定期取引も加わり、外貨取引は相場変動を抑える手段となっていた。この会社は繊維部門の顧客に対し、ロンドンの荷為替信用状引受条件付信用 (Rembourskredit) と手形で取引を成立させていた。これらは国際的に知られた銀行により引き受けられ、どこでも割引かれた。1923年にポンドが下落した時には、アプスの協力で、この信用をドルへ切り替えさせ、手数料を稼ぎ出した。これはアプスが行った最初の重要な定期取引だった。

次の仕事はF. ケーニグスの父が関わっていた、A. シャッフハウゼン銀行協会を買い取ったディスコント・ゲゼルシャフトの持ち分を買い取ることを目的とする発行シンジケート団 (Konsortium) の扱いであった。この取引でアプスはその株式10%を買い取ったが、最終局面で目的を果たせず、会社に損失を与えてしまった。F. ケーニグスはアプスを擁護し、約2年間の「研修休暇」を与え、給与を継続してくれた。アプスはこの機会を利用し、英国、南北アメリカを旅行し、その地で自主的研修を行った。

最初の半年はロンドンのギャランティ・トラスト (Guaranty Trust) で荷為替信用 (Dokumentäre Kredit) と英国銀行システムを身近で学んだ。それから米国へ渡り、ニューヨークのベルギー産を扱う綿花定期取引所で研鑽を積み、この関係でニューオリンズの商会で綿花業界の知識を得た。次の半年は、繊維取引顧客を持つF. ケーニグスの勧めでその本場である南米諸国において繊維産業を勉強した。その次は極東旅行を計画していたが、1927年緊急の仕事に従事するためアムステルダムへ呼び戻された。

そこでは荷為替信用を専門的に扱ったが、ケルンの博物館で人生の転機を迎えることに

なった。妻となるイネツ・シュニツラー (Inez Schnizler) と知り合った。シュニツラー家はメセナ活動にも従事する大家で、アプスは同家の婿にふさわしいと認められた。20歳直前の1928年2月に結婚式を挙げている。新婚旅行の二カ月はスペインとフランスへ行き、パリではやはり銀行商会でフランスの銀行システムの知識を入手し、またフランス語に磨きかけた。新婚旅行から戻った1928年の夏からは、ローディウス・ケーニグス商事株式会社の仕事に復帰した。年末には契約期限が終わり将来を考えなければならなかったが、それについては親代わりのF. ケーニグスが方向を提示した。1928年10月にデルブリュック・シクラーの指導者グスタフ・ラートエン (Gustaf Ratjen) が亡くなった時に、彼はアプスを穴の空いたポストに、当面補助的にはあるが将来は正式なプロクリストとして推薦した。この提案は多くの支持を得られ、アプスはこれを引き受けた。そして1929年に、身重の妻とベルリンへ移住した⁽²⁵⁾。

(2) 大恐慌下、危機管理による名声の獲得

1931・32年にはドイツは大恐慌で打撃を受け、短期の外資に頼らざるを得なくなった。アプスはライヒの中心地で顧客名簿ごとに、一般的問題と個別問題の解決を習得していった。その際には、豊富な外国業務、銀行業務経験者として協力をした。

社交上では控えめであった。夫婦ともベルリン西部の知人たちと小サークルで交流をしていた。その中には、ペーター・グラーフ・ヨルク・フォン・ワルテンブルクも入っていた。またその関係でヘルムート・ジェームズ・フォン・モルトケを知ることになった。彼はシュレージェンのクライザウにおけるその父の資産の金融問題で苦勞していた。その妻フレヤ (Freya) はアプスの妻イネツと親戚関係にあった。このクライザウのグループは後にナチスに対する抵抗運動を開始し、何人かが逮捕され処刑されることになるが、アプス

との関係について、ガルは後の章で触れている。ただし、ガルの著述では、この箇所においては「関係を深める可能性は、重要なものではなかった」と慎重な評価を下している⁽²⁶⁾。

なおこの箇所での中心テーマは大恐慌下でアプスが示した危機管理能力とその手腕、ということになっている。その例としてガルは百貨店のヘルティ(Hertie—元はHermannTiez)とカールシュタットの二つの商業コンツェルンとブレーメンにある北部梳毛紡績(Norddeutsche Wollkammerei & Kammgarnspinnerei)の三つのケースを挙げている。この三例はいずれも返済力が低下する中で信用需要が増していた。しかしそれに応えるべき銀行はコスト急増と外国短期資金の引き上げで、新規に貸付けることが不可能になっていた⁽²⁷⁾。このため企業資金がひっ迫する中で、清算されるにいたった。

このような状況の中でアプスが取り組んだのは「麦から殻をはがすこと」であった、とガルは説明する。一方では将来が見込めない企業からはできるだけ早く撤収し安楽死させ、他方で存続可能な企業については再建計画を立てるか仕向けるかさせた。この結果ごくわずかの年数でアプスはベルリン金融界とドイツ経済界の中で「冷静でそつのない有能な清算家」という評判をとるようになり、さらに活躍の場と人脈を広げた。根本的政治変動と不確実性の中で全体状況と市場法則を見極め、新秩序の下で既存秩序を破壊する試みの足がかりをつかみ、また根本的崩壊の中で誰よりも安定性と継続性を求めたことについて、ガルは高い評価を下している。この時には、1918年の社会変動時のワルター・ラーテナウの「経済は運命である」という記述をアプスが重要視していたという、ギュンター・ガウス(Günter Gaus)の研究をガルは参考している⁽²⁸⁾。

以下具体的に3事例が紹介されている。第一事例のヘルティはデルブリュック・シッ

ラーと業務関係を長年持っていた。大恐慌時にイングランドのマーチャントバンクから借入れをした時に、その不動産持株会社の全株を担保に入れ、それ以外の借入れについては、この銀行商会の合意を前提とすることを取り決めた。しかしアプスが会計帳簿を調べたところ、財務責任者がこの契約に違反し、土地債務を増加させていたことが発覚した。このためアプスは、1931年に締結された問題のある信用を払い戻し、解消させた。

アプスが関わった当時の第二事例、カールシュタット・コンツェルンではデルブリュック・シッラーを含め、バルマー銀行(Barmer Bankverein)他5銀行が関与していた。カールシュタットは1927年以来、他の百貨店の吸収する野心的な経営拡張を行っていた。この結果1930年半ばに銀行借入れが9200億RMまで膨らみ、過剰負債に陥った。それにもかかわらず諸銀行はアプスの影響で救済処置を取った。1931年1月カールシュタットの危機が絶頂に達した時に、諸銀行はライヒスバンクの要請でカールシュタットが銀行に振出した手形を引き受けなければならなくなった。アプスはデルブリュック・シッラーに関しては、自らを主力納入業者とすることをカールシュタットに受け入れさせた。為替を商會が引き受ける代わりに主力銀行(eigenes Haus)となることでカールシュタットの負担を軽減させ、清算に入った。

第三事例の北部梳毛紡績の場合も、行き詰まりの原因は明白であった。企業所有者の一人によるアルゼンチンの会社を通しての粉飾決算であった。アプスは南米での羊毛・綿花取引には習熟していたので、不信感をいだき問い合わせを行い、これを見破った。しかし結局ダルムシュタット国民銀行(Danat-Bank)をも道連れにし、連鎖倒産という銀行危機のピークを1931年7月にもたらした。

アプスはこれらの経済・企業危機への対応でドイチェバンク、ディスコント・ゲゼルシャ

フトの取締役会長エドワルト・モーズラー (Edward Mosler) の注目を浴びていた。また1932年1月にはドイツで行なわれた支払い猶予協定では、デルブリュック・シックラーを代表する代表権を1人で持たされた。しかしその時には依然として銀行被用者 (Angestellte Bankkaufmann), 当時の言葉での銀行員 (Bankenbeamter) に留まっていた。

なおワイマル共和国の崩壊と1933年のナチスの政権奪取時にアプスは31才であったが、さらにその名声を上げる新局面へと入っていくことになった。それはユダヤ系の同僚が職を失い、個人の生活基盤を失っていくのと同様であったこと、またそれは一方での体制への適合、参加と他方での隠れた抵抗、秘密組織内での同調・協力・代理など剣が峰を歩くかのように思わせること、そしてこのような解釈には証拠があり、入念にまた偏見を持たずに見分けて評価を下すならば生じる判断である、とガルはまとめている⁽²⁹⁾。

この点にアプスの独自の能力に対するガルの基本評価が打ち出されている。普遍性をもつかどうかはともかくとして、冒頭で述べた「いかなる政治状況にも適合する人物」というアプス関連の第一著作と共通する視点である。

4. 「個人銀行家」へ飛躍する時代

この章は1933年のナチスの政権獲得から、アプスがドイチェバンクへ抜擢される1938年頃までを対象としている。ガルは表題に見られるように、アプスのナチス政権への接近の仕方を検討しつつ、彼が「個人銀行家」としての資質を開花させていく重要な時期であった、という視点でまとめている。ナチス政権に対するアプスの「内的心情」と「一定の距離」という両側面を検討とし、複雑な文章が続く。読み込むのに骨の折れる箇所であるが、小稿脚注 [4] で触れたジェームズの「アーリア化」関連第二著作の以下の章と関連付け

て読むと分かり易くなる。⁽³⁰⁾

- ・第2章「ドイチェバンクの機構と組織及び経済状況」,
- ・第3章「ナチズムと銀行」,
- ・第4章「[「アーリア化」の諸問題]」。

ただしガルはこの箇所ではジェームズの文章を直接引用してはいない。しかし彼の見方に対し、自分の考え方を対置しているように筆者には考えられる。このことを念頭において以下でガルの記述を詳細に見ていくことにしたい。

(1) ナチスの政権獲得とカールシュタットの経営

冒頭でガルは「アプスはナチズム運動の支持者でもシンパでもなかった。」という叙述から始めている。政治運動には関わらなかったが、ヴェルサイユ条約を修正しようとする限りでは、アプスは中央党、ライヒ総裁ハインリヒ・ブリューニング (Heinrich Brüning) の政策を支持した。他方1931年の経済危機に対するドイツ大銀行と金融界のトップの対応には「危機の度合いを過少評価している」と批判的であった。間違った対応で一時的に「成長と清算の危機」が深刻となっているが、「システム危機」には至っていないと判断した。そしてこのシステムに秩序を与え、経済機能を回復することを「人生課題」及びナチス政権獲得後の「主要課題」と、アプスは捉えていたとしている⁽³¹⁾。

1933年1月以降アプスはデルブリュック・シックラーのただ一人のプロクリストとして、カールシュタット・コンツェルンの清算に取り組んだ。この会社の財務問題は、その間に「政治」問題化したが、それはナチスの「闘争組織」という形をまとった新従業員をユダヤ人従業員に対抗して取り込むためであった。購買ボイコットに直面した支店では、ユダヤ人従業員の大部分を解雇することで反撃することを試みた。これは多くの企業で行われた事例の一つであった。この早急な対応で購買

ボイコットを何とか回避し、またアメリカの債権保有団体を考慮した結果、政府は引受銀行を通じた信用を支援した。ヘルティ・コンツェルンに関しても対外的名声に配慮し、同様の処置が取られた。ただしこのような政府の対応には矛盾する点があった。カールシュタット経営陣からはユダヤ人の解雇とナチス経営細胞に対する批判の声も出たが、政府は妥協点を見出す努力をした。

またコンツェルン内のユダヤ人も政府の姿勢と世論を考慮し、ハンブルクのフリッツ・ワルブルグ (Fritz Warburg) のように会社機関を辞職し、譲歩を行う者も出てきた。正常化への期待 (幻想ではなく、とガルは断り書きをいれている) を抱いた若きプロクリストのアプスは、債券銀行の代表者・顧客として監査役会に参加した。解雇問題には口を挟まず、発言は僅かであり、専らこの会社の清算問題と本来は健全なはずのこの企業への追加融資に集中していたと、とガルは書いている⁽³²⁾。

アプスは清算業務では1932年にこの会社の危機管理マネージャーに就任したプラスマンをパートナーとし、1934・35年の好都合な時期にドル債券のドイツ人保有者に対しライヒスマルク債券への買い替えを勧誘した。この結果会社の負債は減少し、アプスは最高の清算者として名声を確保した。またプラスマンとは後にドイチェバンクでともに取締役として同僚となることを、ガルは付け加えている。

(2) コメルツバンクにみる国家と銀行

アプスは1936/37年にコメルツ・プリファートバンク (Commerz-und Privatbank) の清算問題にもデルブリュック・シックラー商會を代表して関わった。1931年の銀行危機で資本の70%がゴルト・ディスコントバンクを通じた国家の間接所有化に置かれていた⁽³³⁾。ただしライヒは大銀行の所有を継続する意思はなく、ブリューニング政府も、ナチス政権もできるだけ早い再民営化を意図していた。

その例として、ガルはコメルツバンクを取り上げている。ただしそこには複雑な金融政策上及び技術上の事情が絡み、その経過と動機及び利害状況を今日再現することは困難であること、とりわけアプスが演じた役割については研究者間でも意見が分かれていて明確にされていないことを断った上で、この箇所の記述を始めている⁽³⁴⁾。

コメルツ・プリファートバンクの清算には、強力な指導者が付いていたことと、1933年の景気と株価上昇があったため、再民営化への動きを浮上させた。アプスはこの好機を1936年にドライフースバンク (Bankhaus Dreyfus) との会合において利用した。ドライフースとは本来、大銀行所有化にあるカールシュタット株の販売について取引するはずであったが、アプスはその代わりに、ライヒのゴルト・ディスコントバンク所有化にあるコメルツバンク株のコンゾルティウムへのはめ込みを提案した。デルリュック・シックラーは、傘下のフィリップ・レームツマ (Philipp Reemtsma) の25%出資と合わせて再民営化分の50%以上を所有していた。この時すでにプロクリストから出資者に昇進していたアプスが、この取引を計画した。ライヒスバンク、ライヒ経済・財務省の合意も得ていた。コメルツバンクの重役とともに1936年6月にライヒ経済省を訪れ、10月には株式1100万RM分をはめ込み、またオプション1100万RMを直ちに行使した。全銀行株の相場はこの間に急上昇していた。市場の好感は、国有化時代に担保とされたライヒ債保持という義務がはずれたことと、軍需融資のため民間投資が制限される中で、投資機会が生じたことによるものであった。

なおこの引受シンジケート団には、コメルツバンクと接触の深い個人銀行シュタイン (J. H. Stein) も加入していた。ナチスに親密な銀行家でシュタインの出資者であるシュレーダー (Baron Schröder) はユダヤ人商

会との協同作業に抵抗したが、アプスはこの計画を押し通した。

ガルは、「アプスがユダヤ人銀行商会との、まったく自明とは思われない協同作業を無条件で行ったことは確かである」と結論づけている⁽³⁵⁾。なおタバコ産業会社のレームツマとの関わりが、アプスにとっては産業事業家との最初の交流であったことを、ガルは補足として付け加えている。また民営化を推進した成果は、アプスの手腕だけに帰するのではなく、好都合な時機と状況に支えられたものであった。ただアプスはこれらを目的意識的に追求したことを、ガルは強調している。

(3) 富裕者アプス

以上の状況の中で引受シンジケート団、特にデルブリュック・シックラーにもたらされた利益は目覚ましく、アプス個人も収益を得た。最初の二つの取引は100万RMとなった、とガルは計算している。アプスが1935年にデルブリュック・シックラーの出資者となってから3年目で、67万RMの年収を稼いだ（当時の熟練工で平均1,900RM、中間管理職で2,600～3,900RM、ライヒ公務員で3,200～11,400RM）。

アプスは成功した個人銀行家として美術品収集に乗り出し、またベルリン所在カトリック系病院の管理委員会の会計を担当したことをガルは紹介している。そこは元ライヒ宰相ブリューニングや突撃隊による犠牲者を受け入れた所であった。そして1937年に家族ごとシャロテンブルク、ノイウエストンド地区（オリンピック中心地）のメックレンブルク通り（今日のマラトン通り）13番の家へ転居した。アンティーク家具が設置された住居であり、今日も家族が住んでいる。

この家を獲得してからアプスは圧力や強制があっても政治的決定へ加わらない、いわゆる高級金融業者（Hochfinanz）に近い生活を送るようになった。1936年末にはベルリン証券取引所の取締役に就き、カールシュタッ

トを含め14会社の監査役を引き受けた。この状況下でガルはアプスについて、以下のような非常に重要な評価を下している。

「彼の経済・金融界での影響力は、新勢力が支配する秩序に次第に結び付けられていった。アプスはこの状況を自らと他人をも欺くことを試みたが、それはこの体制とその代表者についての皮肉な発言のみならず、指導者（Führer）についての風刺をもって行った。—もちろん政治的に差しさわりのない範囲内で。しかしその核心では、決して変わることなく、体制からの距離を確保していた。またこの状況は、あらゆる皮肉な発言や距離をおいた決まり文句にもかかわらず、個人銀行への出資者という自己防衛的存在をやめた瞬間には根本から変化してしまうことを、自ら充分に理解していた。なぜならアプスはもはやそれ以上は潜ってられないだけではなく、望むと望まざるとに関わりなく、経済政策を広範に決定する中心当局と体制そのものへの大接近を行っていたからだ。」⁽³⁶⁾

1937年にある業務パートナー宛てに、自分は紛れもない個人銀行家であり、それに留まりたいという手紙を書いていたことを、ガルは紹介している。しかしまさにその時に、1870年に創業されたドイツ最大手の銀行であるドイチェバンクから、外国業務担当の取締役就任の要請を受けていた。アプスはより大きな影響力と業務権限を獲得しようと考え、この要請を躊躇することなく引き受けた。36歳でドイツ金融界の中心ポストを得たことは、彼を経済的だけではなく、間接的には政治的に「第三帝国」とその展開に深く結合させることになった、とガルはこの章をまとめている。

5. 第3帝国下、ドイチェバンク取締役の時代

(1) ドイツ最大のユニバーサルバンク外国

部長への就任

ドイチェバンクがアプスをその外国部責任者へ招聘したのは、前任者グスタフ・シュリーパー (Gustaf Schlieper) が死亡し、その事業、特に外国との短期債務の支払猶予交渉を引き継がせるためであった。ベルリナー・ハンデルス・ゲゼルシャフトのオットー・ヤイデルスもアプスの獲得を考えていたが、それ以上の申し出をエドワルト・モーズラーが行った。銀行商会の出資者から大銀行取締役への異動は、収入面ではかなりの損失となることは明らかであった。それにも拘わらずアプスはこれを引き受けた。これに対して、ガルはG. ガウスがアプスにインタビューしてまとめた文章を引用することで、回答を与えている。アプスは、第一次世界大戦時に若き代理オルガニストとしての活動したことを引き合いに出し、自らを象徴的に説明したという⁽³⁷⁾。

ドイチェバンクは伝統的に対外貿易金融、外国業務を経営の中心に置いてきた。1870年にプロイセンでは2番目に創業された銀行であったが、ベルリンでは第一番目の株式銀行である。創業はアーデルベルト・デルブリュック (Adelbert Delbrück) の手により行われ、最初の取締役会長ゲオルク・ジューメンスの指導下で創業者の手を離れ、ユニバーサルバンク業務を展開した。1929年にディスコント・ゲゼルシャフトと合併してからは、ドイツ最大のユニバーサルバンクとなったことを、ガルは強調する。なぜならドイチェバンクは、ドイツが19世紀最後の1/3以降、高度工業化と世界経済へ進出した時期に、国際的な経済進出の上で重要な役割を果たしたからである。ドイツ多国籍企業への融資と南北アメリカ、中・南東欧、近東における国際金融業において。こうして第一次世界大戦前には、フランクフルト新聞が「経済のあらゆる分野でまたほほすべての国に拠点を持つ世界最大の銀行」と呼ぶほどになったとことを、ガルは紹介している⁽³⁸⁾。

この結果ドイチェバンクはその業務をドイツ帝国の国家政策へ急速に結合させていった。しかし第一次世界大戦の敗北により、ドイツの国際関係は遮断され、その業務も苦境に落ち込むことになった。そしてそこからの起死回生の手段がディスコント・ゲゼルシャフトとの合併であった。合併後の新機関は合理化により、民間企業としての地位を維持しえた。とはいえ1932年の経済回復基調にもかかわらず、ドイチェバンクは業務上多くの問題を抱えていた。特に外国業務で損失が大きく、戦時賠償などにより外国支店と子会社を喪失していた。それに加えて、世界経済危機が勃発した。銀行危機以降ドイツの国際信用力は低下し、国際取引を制約していた。ゆっくりと回復しつつある世界経済の中で、かつてのようにドイツが果たす役割と資本市場回復への見通しを開くため、懸命の努力が続けられた。

このような状況下でアプスは並々ならぬ決意を持ってドイチェバンク外国部に就任した。彼が自らの課題をいかに意識していたかについて、ガルはアプスと業界関係者間の書簡を引用しながら以下のように説明する。まず自分が課題に答えられるかどうかはともかく、課題の大きさが魅力的である、とアプスは考えていたこと。またすでにナチスと密接な関係にあったクルト・フォン・シュレーダー (Kurt von Schröder) とも親交を深めたこと。さらに1937年時点では希望を託していたベルリンの銀行商会メンデルスゾーン (Mendelssohn & Co.) のパウル・ケンプナー (Paul Kempner) が、アプスが職業上の社会的身分と外国にも伝波したドイツの個人的名声を活用できるだろうとの期待を寄せたことなどである⁽³⁹⁾。

さらにアプスは国際部長として、1986年に設立されたドイツ海外銀行の監査役会長と1989年設置のドイツアジア銀行の監査役副会長を兼任することにもなった。こうして1937年9月には、その年の末にドイツバンクへの移籍

が予告され、10月のはじめには取締役会へ出席した。

アプスの最初の仕事は、ロンドンでの支払い猶予交渉であった。口内炎を患いながらもロンドンへ出向き、彼をこの交渉委員に選出し、ライヒスバンク総裁でありまたその年の11月までライヒ経済大臣であったシャハトに出会った。この交渉は長年に渡り、戦争末まで長引かせることに成功した。この交渉はドイツ側からすると、軍需経済向け資金捻出のための為替枠の確保、ナチスの広域拡張政策の容認を促した。オーストリア併合後の同国対外債務をドイツ帝国へ移す取扱いを巡るロンドンでの交渉にも参加し、戦争の勃発後支払猶予は、中立国、特にスイスとの金融取引を維持することに貢献した⁽⁴⁰⁾。

(2) オーストリアの「併合」とクレジットアンシュタルト

ガルはこの箇所を以下のように書き出し始めている。

「1938年1月2日にアプスはドイチェバンク取締役員としての活動を開始した。同年3月にはオーストリアのドイツ『併合』との関連で、最初の重要課題を負った。それは『大ドイツ帝国』の一部でドイチェバンクを主要な地位に置くことであった。」⁽⁴¹⁾

しかしドイチェバンク・マイント支店L. シュレーダーの報告から、同行がこの「オストマルク」の地で短期間に支店設置を目指すことは難しいと考えられていた。この点については、第二著作のこの章の脚注14. に紹介されている⁽⁴²⁾。このため戦略的選択手段として、同行と友好関係にあり、この地の最大の銀行クレジットアンシュタルトを買収することが目標に据えられた。同行にとって後者は東南欧州(Südosteuropa)関係で重要な利害関係を持っていたからである。

しかしこの作業は、ドレスナーバンクとの

対抗関係もあり、非常に難航した。このため一筋には進まず、複雑な過程をたどった。この点について、筆者はすでにH. ジェームズがまとめた記述を紹介している⁽⁴³⁾。そこで以下ではその紹介と重複しないように、ガルの立場から見た整理を紹介していくことにする。

アプスはオーストリア「併合」の5日後の1938年3月17日に、合併交渉のため関係者と共にウィーン入りした。新領域における事業会社と銀行の役員獲得を目指したが、党の側は仲介者を通してオーストリア銀行業界の迅速な「アーリア化」を求めた。白羽の矢を当てられたのは、クレジットアンシュタルトでは下位の地位に付いていたルドルフ・パイファー(Rudolf Pfeiffer)であり、ナチ党の委任により同行の特別顧問に任命された。彼は27日にはゲーリングからオーストリア銀行業界の「アーリア化」を最速で遂行させること、という指示を受けた。また2週間後には党と新ライヒ(オストマルク)占有者であるアルトゥル・ツァイス-インクヴァート(Arthur Seyß-Inquart)の提案で、彼は同行取締役会長に任命された。

クレジットアンシュタルト(以下ガルの本文に習い、C. A. と省略する)の株式は1931年のオーストリア銀行危機の最中に国有化され、「併合」後はライヒへ移管された。「併合」直後に同行は二人のユダヤ人取締役を排除していた。またC. A. 経営陣はドイチェバンクとの友好関係を持株関係で深めると同時に、自立した機関としてオーストリア経済の要請に応えることを望んだ。しかしドレスナーバンク及びライヒス・クレジット・ゲゼルシャフトも同様の関心を持っていた。このことはベルリンのドイチェバンクでも掴んでいた。このことをガルはアプス宛てのモーズラーの電信で紹介している⁽⁴⁴⁾。このためアプスは、ウィーンにいたライヒスバンク総裁シャハトを訪問することにした。この時から、2大銀行勢力とナチ党内利害関係者がからむ複雑な

駆け引きが展開された。

アプスらはC. A. 合併のため同行の財務と業務状況の調査を行ったが、ツァイス・インクヴァートの指導下にある商業大臣ハンス・フィッシュベック (Hans Fischböck) の抵抗に遭遇した。フィッシュベックは自らの経済利害と野望をドイチェバンクに対する個人的恨みと結び付けた。アプスは1938年4月に取締役会長解職されたものの、C. A. の平取締役役に留まっていた財務大臣と接触し、合併工作を進めた。その目的はドイチェバンクがC. A. が南東欧州に対して持っていた関係を、ウィーン銀行経由で引き継ぐことであった。しかしフィッシュベックはドイチェバンクの株式取得をその目的に叶うものとはみなさなかった。合併企業と友好的な契約を結ぶに際して政治的保障が確保されないこともあり、アプスはこの契約には国家の承認が得られないと判断した。そこでライヒス・クレディトアンシュタルトと国有企業の合同工業会社 (Viag) との密接な協力で推進すべきである、と考え直した。この点については、「ドイチェバンクの主導権が、新オーストリア全権委員で同時にヒトラーの経済顧問であったウィルヘルム・ケップラー (Wilhelm Keppler) の強力な拒否にあったことが決定的だった。」のではないかと、ガルは整理している⁽⁴⁵⁾。なおこの計画はシャハトも入り進められていくが、アプスが懸念したのは、ドレスナーバンクとの対抗関係であった。そちらは既にウィーンで、メルクールバンクを買収していたからである。

ドイチェバンク首脳部とアプスは財務省事務官宛てに文書をも出し、ドイチェバンクの意向を要請するが、最終的にドイチェバンクによるC. A. の買収もウィーンでの独自支店の設置も認められなかった。ただし、ケップラーがライヒ経済大臣を解任された後には、アプスはいくらか影響力を持てるようになった。しかしフィッシュベックの方は依然とし

て妥協を許さなかった。このため、銀行経営に関心をそれほど持っていない合同工業会社社長とアプスとの間で1938年に会合が持たれた。そしてこれらの問題については時期を追って解決すること、C. A. の持ち株の75%はドイチェバンクへ売却し、将来は全株を譲ること、が確認された。

こうして1938年末になってフィッシュベックの個人的賛同を何とか取り付け、株式の25%がドイチェバンクへ売却された。12月30日に合同工業会社と同行の間で契約が交わされ、ドイチェバンクにC. A. の経営に関する特権が付与された。アプスは他の役員とともに、同行代表者としてC. A. の監査役員に就任した。なおフィッシュベックは、実質的役割を果たせないにも関わらず、その間に東部 (ポーランド・ウクライナ・キエフ)、南部欧州への拡張の際の政治指導という理由で、C. A. の取締役会長に就任した。1940年には占領オランダにおける経済・金融特別委員 (Kommissar) に任命されウィーンを後にしていたこともあり、彼の影響力は次第に不明確となっていた。

以上、かなり長い時間を必要としたやり取りの中で、アプスはしだいに目標を達成していった、とガルは結論付けている。1942年5月に合同工業会社はさらに25%の株式をドイチェバンクへ売却し、見返りにC. A. とドイチェバンクの工業持ち株の重要部分を受け取った。こうしてドイチェバンクによるC. A. の決定的な買収は終了した。ガルの主張点は以下のように、まとめられる。

「それにもかかわらず、アプスは長期に渡り、すなわちなチス政権奪取以前から、またドイツ帝国後期において年月をかけて構想していた銀行目標の枠内において取引を行った。彼が最終的に従った業務遂行に対する諸条件は、この体制の政策を生み出した。これは副次的効果でしかないと同

に、銀行側にとってはどう見ても取引を指導する目論見などでは到底ありえなかったものの、その目論見と指導は体制へ接近する道を歩ませることになった。』⁽⁴⁶⁾

以上見たように、ガルはアプスの経営目的に沿った内在的省察を加えながら事態の推移を説明している。このような整理はガルの基本視点の特徴である、と考えられる。

-
- (1) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. München 2004.
- (2) 次の脚注 (3) の著作の著者紹介でL. ガルの書いたものを見るとそのことが分かるため、以下に記しておく。
Benjamin Constant. Seine politische Ideenwelt und der deutsche Vormärz. Wiesbaden 1963.
Der Liberalismus als regierende Partei. Wiesbaden 1968.
Bismarck. Der weiße Revolutionär. Berlin 1987. (I. Auflage Berlin 1980).
Europa auf dem Weg in die Moderne 1850-1890. München 1989 (I. Auflage München 1984).
Bürgertum in Deutschland. Berlin 1989.
Von der ständischen zur bürgerlichen Gesellschaft. München 1993.
Fragen an die deutsche Geschichte. Berlin 1994. (I. Auflage Berlin 1971).
- (3) Lothar Gall, Die Deutsche Bank von ihrer Gründung bis zum Ersten Weltkrieg 1870-1914, in: Lothar Gall/Gerhard Feldman/Harold James/Carl-Ludwig Holtfrerich/Hans Büschgen, *Die Deutsche Bank 1870-1995*, München 1995.
- (4) Harold James, *The Deutsche Bank and the Nazi Economic War against the Jews-The Exploitation of Jewish-Owned Property*. Cambridge 2001. 及び拙稿, 「ユダヤ人資産の「アーリア化」に関する研究の進展-ハロルド・ジェームズの「アーリア化」関連第二著作を中心として-」(1) ~ (3)。

『北星論集』第47巻第2号, 2008年3月157~175ページ, 第48巻第1号91~111ページ, 第48巻第2号97~121ページ。

- (5) Unabhängige Expertenkommission Schweiz-Zweiter Weltkrieg, *Die Schweiz der Nationalsozialismus und der Zweite Weltkrieg*, Schlussbericht, Zürich 2002. スイス独立専門委員会, スイス=第二次対戦 [編] (黒澤隆文・尾崎麻弥子・川崎亜紀子 [訳], 「ナチズム・第二次世界大戦とスイス, 最終報告書」, 独立専門委員会, スイス=第二次世界大戦, 第一部原編 (黒澤隆文編訳, 川崎亜紀子・尾崎麻弥子・穂山洋子訳) 『中立国スイスとナチズム-第二次世界大戦と歴史認識』, 京都大学学術出版会2010年所収。
- (6) 筆者が管見するところでは2006年くらいまではホロコースト諸問題に関する出版が盛んであった。銀行関連では, コメルツ銀行とドレスデン銀行に関する以下の著作が刊行されている。後者は4巻本からなる大部の著作である。Ludolf Herbst/Thomas Weihe, *Die Commerzbank und die Juden-1933-1945.*, München 2004. Klaus-Dietmar Henke, *Die Dresdner Bank im Dritten Reich*, Band1~4. München 2006. しかしそれ以降は波が引いていると思われる。なお行き過ぎたホロコースト抗議活動への部分的反論としては, 以下の書が刊行されている。Norman G. Finkelstein, *The Holocaust Industry-Reflections on the Exploitation of Jewish Suffering*, London 2003. ノーマン・G・フィンケルスタイン (立木勝訳) 『ホロコースト産業-同胞の苦しみを「売り物」にするユダヤ人エリートたち』, 三交社2004年。
- (7) Lothar Gall, A man for all seasons? Hermann Josef Abs im Dritten Reich. In: *Zeitschrift für Unternehmensgeschichte (ZUG)*, Heft 2, 1998, S.123-175.
- (8) Lothar Gall, Hermann Josef Abs [1901-1994], in Hans Pohl (Hrsg.), *Deutsche Bankiers des 20. Jahrhunderts*, Stuttgart 2008.
- (9) Lothar Gall, *ZUG*, Heft 2, 1998, S.123.
- (10) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs*. S.5. NEXUSaudiobooks, Der Bankier

- Hermann Josef Abs-Eine Biografie von Lothar Gall の CD 表の表紙の裏面。
- (11) *Deutsche Bankiers des 20. Jahrhunderts*, S. 1.
- (12) *Deutsche Bankiers des 20. Jahrhunderts*, S. 4.
- (13) *Ebenda*.
- (14) *Deutsche Bankiers des 20. Jahrhunderts*, S. 6 ff.
- (15) *Deutsche Bankiers des 20. Jahrhunderts*, S. 12.
- (16) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 7
- (17) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 8.
- (18) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 9.
- (19) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 10.
- (20) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 12f.
- (21) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 14.
- (22) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 16f.
- (23) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 19.
- (24) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 20.
- (25) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 23ff.
- (26) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 29.
- (27) 1931年6月の時点で3大銀行(ドイチェバンク及びディスコント-ゲゼルシャフト、ドレスナーバンク、コメルツ・プリファーツバンクの各銀行の損失は合計で7億 RMとなっていた。) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 30.
- (28) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 30ff. 一応ガウスの原資料を示しておく。Günter Gaus, Hermann Josef Abs, Organist an den Registern wirtschaftlicher Macht, in: Gunter Gaus, *Zur Person und Antwort*. 2. Band. München 1966.
- (29) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 34ff.
- (30) 拙稿,『北星論集』第47巻第2号, 2008年3月163~167ページ
- (31) ただしこの課題追及にはいくつかの局面があったことを, ガルは同じ個所で指摘している。この政権は短期に終わるという当初の幻想, 既存経済秩序を維持しようという希望で徐々に適応した時期, 危機の最初の局面で見せた並走する政治・経済的努力から, 体制の終焉を見越し戦後秩序に向け可能な限り救済しようという, 心に秘めた抵抗への努力。Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 37ff.
- (32) ここでガルは当時の用語で「洗礼を受けたユダヤ人」であるドイチェバンク取締役会長, ゲオルク・ソルムセン (Georg Solmssen) が監査役会長宛てに書いた文書を引用している。その中で彼がドイツにおけるユダヤ人の経済社会からの抹殺と非ナチスドイツ国民の受動性, 社会的連帯感の欠如, 屈辱と不利益に対する沈黙, 希望の無さを切々と訴えていることを紹介している。Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 38.
- (33) ダルムシュタット国民銀行の破産以後ドイツ金融システムは崩壊に瀕していて, ドレスナーバンクは90%が国家所有されていた。このことが後にこの銀行がナチスシステムへすり寄り, その政策推進機関となったことをガルは指摘する。Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 40.
- (34) ガルは対立する見方としてクリストファー・コッパー (Christopher Kopper) とヘルベルト・ヴォルフ (Herbert Wolf) の研究を紹介している。後者はアプスが中心的役割を果たし, 模範的動きをしたと称賛しているが, 前者はその点については非常に慎重であるという。経済大臣との会談についての国家文書の記述をめぐり対立している。Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie*. S. 41.
- (35) レームツマは他にも人絹会社の国籍再返還やハパク (Hapag) 社の再民営化の際

- にも、ゲーリングとドイチュバンク、アプスと協力をした。Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.43.
- (36) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.45.
- (37) ガウスによると、個人銀行家の活動は36音栓付き2鍵盤のオルガンであるが、ドイチュバンクは72音栓付5鍵盤の素敵なオルガンを奏でる安い給料のドームオルガニストとしての地位を提供した。これはオルガン弾きにとっては羨望の的になる素晴らしい仕事であり、より大きな楽器を適当と考えてアプスはこれを選んだという。これをガルが紹介している。Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.46f. 一応ガウスの原資料を示しておく。Günter Gaus, Hermann Josef Abs, Organist an den Registern wirtschaftlicher Macht, in: Gunter Gaus, *Zur Person und Antwort.* 2. Band. München 1966.
- (38) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.49.
- (39) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.51.
- (40) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.51-53.
- (41) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.53.
- (42) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.448.
- (43) 拙稿, 「ユダヤ人資産の「アーリア化」に関する研究の進展—ハロルド・ジェームズの「アーリア化」関連第二著作を中心として—」(2), 『北星論集』第47巻第2号, 2008年3月, 104~109ページ。
- (44) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.54f.
- (45) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.56. なおこの点については、以下の拙稿を参照のこと。前掲, 106ページ。
- (46) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs. Eine Biographie.* S.58.

[Abstract]

The Banker H. J. Abs in the Nazi Era : The Viewpoints of Lothar Gall and his Refutation of Abs' Critics in his Biography of Abs(Part 1)

Hironori YAMAGUCHI

The Book *Der Bankier, Hermann Josef Abs—Eine Biographie* by Lothar Gall, a historian of the Johann Wolfgang-Goethe University in Frankfurt, was published in 2004. It was the first book in Germany to describe the whole life and professional career of H.J.Abs, the director of the Deutsche Bank including the period during the Nazi Era. In this book, Gall refutes the critics of Abs, especially the criticisms of Harold James. This paper introduces Gall's description of Abs' business and banking activities as the Chief of Foreign Affairs at Deutsche Bank during the Nazi Era, and discusses the viewpoints of Gall's refutations. This paper also examines the discussion between Gall and James concerning the role of Abs in the death of the director of the Bohemian Union Bank(BUB). The author also expresses his viewpoints concerning existence or nonexistence of documents, and the managerial responsibility of the headquarters of the Deutsche Bank.